

研究経過報告 蔭山英順

昭和49年10月1日に新制度の臨床心理系の助手として着任し、臨床心理相談室において、自閉症児の遊戯治療を中心とした臨床実践に追いまわされ、すでに半年が経過してしまっただけで、大学における臨床家として重要な研究の柱においては、今、反省するに努力の足りなさを痛感している。

着任前より協同研究として、丸井教授を中心とする自閉症研究グループ、精神健康研究グループの2グループに所属し、前者では自閉児の発達研究を、後者では青年期の精神健康について研究を進めてきた。そのまとめとして、自閉児に関する研究においては日本教育心理学会第16回総会において「自閉児の集団適応に関する研究」「自閉児の言語発達の類型に関する研究」を発表してきた。また、自閉児の言語発達における病理言語の持つ意味に関して「独語」「反響言語」と対人関係発達の関連性の検討を行い、愛知教育大学神野秀雄氏との協同研究として聴覚障害—3巻2号—に「自閉児の speech に関する研究—4症例の検討—」を発表した。

現在の段階でまとめるに到っていない仕事として主に次の2つがある。

1；自閉児の言語発達に関する研究 自閉児の言語発達を典型的に把握しようとする研究の展開の中で、す

で発達した五類型に入らない発達を示す一群の存在を考えてきている。それは精神遅滞の子供が示す言語発達過程と類似している群である。すなわち始語期が遅れており、しかし一方で対人関係における自閉的障害および同一性の保持を明白に持つ群である。そこで、始語の遅れている自閉児において治療期間中に始語の出現した事例を追跡研究し、話し言葉の変化を検討している。現在、話し言葉の(1)ボキャブラリーの増加速度、(2)ボキャブラリーの品詞構成の変化、(3)文の長さの変化に関してのデータの収集を終り分析中である。こうした自閉児の言語獲得過程を対人関係の発達とからめ、単純性言語発達遅滞の事例および精神遅滞児の事例のそれと比較することにより自閉児の発達の特殊性を明確にしていこうとするものである。

また、過去の五類型のうちでも言語消失期を持つL1型に関して、消失前の状態像、消失中の状態像および再出現後の発達に関して詳細な検討を行い、教育心理学会第17回総会で発地の予定である。

2；青年期の精神健康に関する研究 主として青年期の女子の精神健康の問題として、「思春期やせ症」の事例研究により、理想自己と現実自己との統合の問題として、治験例のカウンセリング過程を現在分析中である。

この1年の回顧と今後の展望 大橋正夫

1. ここ数年間、いわゆる印象形成モデルを手がかりとして、パーソナリティの印象形成過程の解明に取り組んできている。しかし、こうしたアプローチの有効性については教室研究会でいろいろ指摘もされたし、誰よりも私自身が鋭く気づいているつもりである。このあたりで、もっと核心に直接迫るような方法をとらなくては、と思いながら、また1年が過ぎた。さきわい昨年度は、日本心理学会第38回大会で印象形成の問題についてシンポジウムを企画し、司会するという機会を与えられた。そこで私は、従来のアプローチの限界が明らかにされればと願ったのであるが、私のこの意図がどの程度まで果たされたかについては十分確信できるまでにはいたっていない。

しかしながら、客観的な水準での成果はさておき、私

はこのシンポジウムを契機として、新しい研究の局面に進もうと、少なくとも主観的には意識し、共同研究者の方方とその問題について議論を始めた。その成果を世に問うためには後1・2年を要するであろうが、その第一歩を本年秋名古屋大学で開催される日本グループ・ダイナミックス学会第23回大会で報告することにしている。

2. 私の研究の究極的目標は対人関係の心理学の体系をつくりあげることにあることは、すでに何度も告白している。そのための階程として、これまでの諸研究者の業績を正に評価することが必要であろう。昨年度大学院の授業でF. HeiderのThe Psychology of Interpersonal Relationsをテキストにとりあげてみた。今度この名著といわれる本を読みかえしてみ、いままで自分が彼を理解したと考えていたのがいかに皮

相にすぎなかったかを痛感させられた。学生諸君にも相当難解であったようであるが、彼の所説を私の中で明確に位置づけるために、某出版社からの需めに応じて今度その翻訳を出版することにした。

Heiderによって播かれた種子のうち、彼にとってより重要なのはいわゆる balance theory のそれではな

く、attribution theory のそれであったと思う。これを少し体系的に学習したいと思い、本年度の大学院の授業で取りあげることにした。院生諸君は相当アゴを出しているようであるが、私はいまその柔軟な思考性に魅かれているところである。

課 題 お よ び 現 況 水 野 欽 司

一年は短いもので、雑件に追い廻されているうちに、あっさり過ぎ去ってしまった……と先回この欄に書いたが、今回も同じことを、しかも今度は過ぎた五年余の年月に対して、書かなければならない。

あわただしかった五年を回顧して、要するに、私は統計的データ処理というものの内容と機能を、もっぱらデータ本位の立場と実践的価値を重んずる立場とから、探し求めて来たように思う。それゆえに、いたずらに解析方法の“美学”を追いかける風潮に反対する一方、いわゆる「雨が降れば天気がわるい」式の内容乏しき理論研究での利用を排斥した来た。このことは、いろいろね機

会に学生諸君にもよく語って来たことである。

実際に自分が果し得たものは余りにも小さいが、いろいろな試みを通じてデータ解析もっている問題の輪郭にわずかながら触れることができたことに満足している。この五年間に得たものを土台にして、今後はこれらを具体的な成果に結びつける努力を重ねて行きたいと思う。

将来への課題は大きく重くなるばかりであるが、紀要のこの欄にも別れを告げるときが来てしまった。しかし私は変ることなく、たとえその歩みは遅くとも現在の延長線上を生き続けるであろう。さよなら。